

酪農における和牛飼育 ～酪農経営に和牛を取り入れる 場合に知っておくべきこと～

トータルサポート室 出雲 将之

黒毛和牛は全国的な繁殖頭数の減少や、高級牛肉としてのインバウンド需要などから、枝肉価格が高止まりしており、それに合わせて和牛素牛は家畜市場において、かつてない高価格で取引されています。酪農経営の補完として、和牛を取り入れることを検討される方も多いと思いますが、本稿を参考にしながら和牛導入を考えていただきたいと思います。



1 和牛飼育のメリット

酪農地帯には、下記の通り豊富な草資源など牛を飼う条件が揃っています。和牛の飼養管理技術や飼育環境が整えば、副業として、あるいは将来のために和牛飼育を始めることが可能です。

- (1) 豊富な草資源の活用で腹のできた子牛生産が可能
- (2) 粗飼料、施設、牛飼い技術が揃っていて、和牛飼育の開始が容易
- (3) 乳牛を借り腹とした、受精卵移植による和牛生産が可能

2 和牛を飼う酪農家が知っておくべきこと

(1) 和牛の生理生態を知る

和牛の生理生態を知らずに、乳牛と同じ感覚で飼育を始めると和牛生産は上手くいきません。和牛の子牛

は、寒冷に弱い、すぐに下痢をする、風邪をひきやすいなど病気に弱く、重篤化による子牛の損耗が激しい生き物です。免疫力を高め、子牛疾病による発育不良を出来るだけ起こさないような管理が必要です。そのためには、次のことを心がけてください。

- ①親牛への分娩前増し飼い
- ②初乳の確実な摂取
- ③子牛は栄養を充足させる
- ④ワクチネーション
- ⑤新鮮な空気の提供

(2) 市場性の高い子牛を生産する

和牛は9～10カ月齢の子牛を家畜市場に出荷し、そこで競りにより価格が決定されます。高い子牛が売れるほど所得は高まります。価格決定要素は次の通りです。

- ①腹容があり発育が良好
- ②血統が優れている
- ③過肥ではない

子牛の購買者は肥育農家です。以前に購入した子牛の肥育結果が良ければ、その農家の子牛を購入します。リピーターがつくような牛飼いになれば申し分ありません。

(3) 素牛の価格は変動する

和牛肉の需要、子牛生産頭数の増減、その他社会的現象により、子牛価格はこれまで去勢牛で、35～80万円/頭の幅で変動してきました。たとえ安くなっても、所得がマイナスにならないよう、次のことに取り組みましょう。

- ・繁殖成績を良好にし、分娩間隔を短縮させる
- ・施設機械に過剰投資をせず、負債を極力持たない
- ・子牛事故率を低減し、販売頭数を確保する
- ・自給飼料を活用する

3 酪農に和牛を取り入れる手順

(1) 酪農地帯での和牛飼育

和牛を導入する目的には次のパターンが考えられます。

- ①和牛専業経営への転換

後継者不在のため、朝晩の搾乳作業があり労働的にきつい酪農は将来的に中止し、草地、機械、施設が利用でき、高齢になっても管理できる和牛経営に切り替える。

②乳肉複合経営への転換

酪農部門を含め後継者に経営委譲し、親世代は和牛部門で所得を確保しながら乳肉複合経営を展開する。

③乳牛への和牛受精卵移植による所得向上

乳牛部門の規模を拡大せずに経営全体の所得を高めるために、ホルスタイン初妊牛に和牛受精卵を移植し、生産子牛の販売で総収入を増やす。将来的には、乳肉複合経営を視野に入れる。

(2) パターンに応じた導入手順

上記パターンでの導入手順と利点、注意点は次の通りです。

①の場合（和牛専業経営への転換）

酪農経営を展開していたが、高齢のため搾乳を中止する予定である。住み慣れた今の居住環境から離れず、現有施設機械を活用しながら、夫婦で無理なく飼養できる和牛繁殖経営に徐々に切り替える。手順としては、酪農経営を展開しているときに、和牛受精卵移植により生産された雌牛を自家保留し、将来の和牛繁殖経営の基盤づくりを行っておく。

【利点】

- ア 年金支給と併せて、余裕のある生活が可能な所得が確保できる
- イ 今までの施設、機械、草地を活用でき、投資せずに所得確保が可能

【注意点】

- ア 和牛子牛の価格は変動しやすく、所得にぶれが生じやすいので必要以上の投資はしない。老夫婦での適正飼養頭数は、繁殖牛で20頭を目安にする。
- イ 子牛事故などが多いと、目標とする所得が得られないので適切な飼養管理に努める。

②の場合（乳肉複合経営への転換）

後継者夫婦が酪農部門の中心となり、労働的に余裕が出来た。酪農部門の飼養頭数拡大には限界があることから、和牛部門を親世代が中心となって取り組み所得向上を図る。乳牛の借り腹を利用した受精卵移植による和牛素牛生産と、和牛繁殖雌牛の産仔と併せて、年間25頭程度の素牛販売を目標とする。

【利点】

- ア 酪農部門の余剰資産、人員を和牛に利用する仕組みとするので、資産の利用効率が高まる。
- イ 乳牛の借り腹を活用した和牛素牛生産が可能となり、ホルスタイン育成販売と比べて短期間での所得確保が可能となる。

【注意点】

- ア 和牛繁殖雌牛を飼養する施設は必要最低限とするなど、必要以上の投資は控える。
- イ ホルスタインと同じ飼養管理を行うと、繁殖や子

牛育成に失敗する。和牛部門の規模拡大は徐々に行い、技術習得に時間をかける。

ウ 労働時間は増えるので、労働力に余裕のない経営ではお勧めできない。

エ 和牛導入検討の前に、酪農部門での繁殖改善や乳質の向上など、手をかけることで所得が確保できる課題はないか、よく検討する。

③の場合（乳牛への和牛受精卵移植による所得向上）

酪農部門の規模拡大はせずに、初妊牛への和牛受精卵移植により生産子牛からの所得を高める。

【利点】

- ア 和牛を持たずに素牛生産が出来る。
- イ 乳牛の借り腹を活用した和牛素牛生産が可能となり、ホルスタイン育成販売に比べて短期間での所得確保が可能となる。

【注意点】

- ア 和牛子牛育成には注意が必要で、ホルスタインと同じ管理では失敗するので、技術習得に努める。
- イ 受精卵移植による受胎率が悪いと、分娩間隔が長くなり乳生産にも影響する。受精卵移植技術のレベルが高いことが前提条件となる。
- ウ 乳牛の後継牛が減少する心配があるので、雌雄判別精液を活用する。

4 和牛経営の特質と注意点について

- ①牛が揃うまで収支は厳しい（揃ってしまえば所得率は高い）
- ②牛が揃い、子牛事故率が低く、分娩間隔が短いほど所得が高くなり、酪農経営へ十分な所得補完効果をもたらす
- ③和牛は酪農に比べて労働時間当たりの所得が高いため、2世代酪農経営には最適
- ④和牛を取り組むうえで考えておくべき課題は次の通り

- ア 高値販売が出来る子牛の育て方を習得する
- イ 効率的で低コストな飼い方が出来る施設と装備を考える
- ウ 高値販売が出来る血統の選び方、自家保留、交配の仕方を勉強する

⑤和牛経営の収支

所得に大きな影響を与える要因は次の通り

- ・ 販売価格の変動が大きい
 - 去勢牛 400千円～900千円
 - 雌牛 300千円～800千円
- ・ 販売頭数の多少
- ・ 子牛事故率の高低
- ・ 分娩間隔の長短